

---

別冊レポート

金と銀、そしてお金の話

&

恐慌が来たとき  
家族の財産を守れますか

---

通貨・貴金属・経済危機への備えを考える

Special Report

---

# 金と銀、そしてお金の話

— 5000年の問いを解きほぐす —

2026年5月

財布の中に何が入っているか、あなたは知っている。  
でも、それがなぜ「お金」なのか、説明できますか？

## 目次

### はじめに

序章 常識という名の物語 — 教科書が嘘をついていた

第一章 お金の本当の起源 — 物々交換神話の崩壊

第二章 コインの誕生 — 便利さではなく、暴力から

第三章 大航海時代 — 「交換」という名の略奪

第四章 インフレ・デフレ・資本主義の必然 — なぜ貨幣は増え続けるのか

第五章 お金という装置の限界 — なぜ、測れないものが消えていくのか

終章 ところで……金と銀は何者なのか — 国家・信用・電子から独立した「最後の物体」

エピローグ それを知った後で

おわりに 四人の夜

おまけ 言葉の罠について

参考文献

## はじめに

金と銀を持つことは「インフレへの備え」という技術的な話ではありません。  
それは「誰かが管理するお金の物語」の外側に、自分の一部を置いておくということです。  
5000年間、人間はそれをしてきました。あなたもその長い列の一人です。

なぜそう言えるのか。その理由を、これから一緒に辿ってみましょう。

常識を疑うって、怖いかもしれません……（笑）

### 序章

## 常識という名の物語

— 教科書が嘘をついていた

「お金は、昔の人が不便な物々交換をやめるために発明したものです」

どこかで聞いた覚えがあるでしょう。学校で習ったかもしれない。でも実は、この「常識」には証拠がひとつもありません。

人類学者のデイヴィッド・グレーバーが2011年に発表した研究は、世界中の経済学者と人類学者を驚かせました。「物々交換から貨幣が生まれた」という話は、アダム・スミスが18世紀に思いついた仮説であって、歴史的な事実ではない、というのです。

「純粋な物々交換経済の例は、記述されたことも、そこから貨幣が生まれた例も、これまで一度も確認されていない」

—— キャロライン・ハンフリー（ケンブリッジ大学人類学者）

では、本当は何があったのか。

贈り物と、借りと、関係でした。

村の誰かが食べ物に困れば、隣人が分けてやる。分けてもらった側には「借り」の感覚が残る。いつかお返りする。この「借り（IOU）」のネットワークこそが、貨幣より何千年も前から人類を支えていた経済の実体でした。

お金は便利さのために生まれたわけではありません。

お金が生まれる前に、もっと豊かで人間的な仕組みがあったのです。

この事実から始めると、金と銀の見え方が変わります。そして最終的には、「なぜ今も金と銀が大切にされるのか」という問いの答えが、まったく違う場所に見えてきます。

## 【注】

**注 1** グレーバー『負債論：貨幣と暴力の5000年』（2011年）で引用。物々交換経済が「自然な原始状態」だという考えはアダム・スミス『国富論』（1776年）に由来するが、スミス自身もこれを実証したわけではなく、思考実験として提示したに過ぎない。その仮説が250年間、教科書に「事実」として書かれ続けた。

**注 2** グレーバーによれば、物々交換が確認されるのは「もともと貨幣経済があったのに、何らかの理由で通貨が消えた社会」に限られる。例：1998年ロシア金融危機後のロシア。物々交換は原始的な前段階ではなく、貨幣経済の「後退形態」だという逆説。

## 第一章

# お金の本当の起源

## — 物々交換神話の崩壊

### ◆ 借りが先、コインが後

5000年以上前、メソポタミアの神殿には粘土板がありました。そこに記されていたのは複雑な貸借の記録です。「あなたは私に銀7シェケル分の小麦を借りている」。これは貨幣が生まれるはるか前の話です。

コインはなくても、「誰が誰に何を借りているか」というネットワークが社会を動かしていました。これが本当の最初期の「経済」です。

グレーバーが「軸の時代（800BC～600AD）」と呼ぶ時期に、初めてコインが登場します。しかしその目的は、「交換を便利にするため」ではありませんでした。

## ◆ 王様からご褒美をもらったら

想像してみてください。あなたは古代の職人です。王様の宮殿を建てる仕事をして、ご褒美に光り輝く金の塊をもらいました。村に帰ると、隣人がそれを見て言います。「それ、きれいですね。私の持っている羊と交換してくれませんか？」

ここに何かが生まれています。金属の塊への「欲しい」という感情、そしてそれを媒介にした関係。これがお金の感情的な起源かもしれません。ルールより先に、欲望と関係がある。

では、もっと大きなスケールで、コインが社会に広まったのはなぜか——その問いの答えは、次の章にあります。

### 【注】

**注 1** グレーバーの「軸の時代」論は、哲学者カール・ヤスパースの概念を借りている。紀元前 800～200 年頃、中国・インド・ギリシアでほぼ同時に哲学・宗教の大転換が起きた。コインという抽象的な価値概念の登場が、抽象的な哲学思想を呼び起こした可能性がある。

**注 2** シュメール文明（現イラク南部）の粘土板には紀元前 3500 年頃から複雑な貸借記録が残る。「1 シェケルの銀」という単位は重さの単位であり、実際に銀が毎回やり取りされたわけではない。コインの登場（紀元前 630 年頃）より 3000 年近く早い。

## 第二章

# コインの誕生

### — 便利さではなく、暴力から

## ◆ 川底の金と銀——リディアという王国

現在のトルコ西部に、かつてリディアという小さな王国がありました。その王国を流れるパクトロス川の川底には、金と銀が自然に混ざり合った「エレクトラム（琥珀金）」が堆積していました。

紀元前 630 年頃、この川底の金属に王家の印章を刻んだ小さな塊が作られました。世界初のコインです。不揃いで、潰れたビーンのような形——でもそこには「王家が重さと純度を保証する」というメッセージが刻まれていました。

「リディア人は、私たちが知る限り、金銀のコインを最初に使い、小売商を最初に始めた人々である」——ヘロドトス『歴史』第 1 巻 94 節

## ◆ なぜコインは広まったか——傭兵という答え

しかし「便利だから」コインが広まったという話は、半分しか正しくありません。コインが社会に一気に普及した本当の理由は、もっと即物的です。

戦争です。

古代ギリシアの都市国家は常に戦っていました。戦うには傭兵が要る。傭兵に物資を贈り物として渡すことはできない——何百マイルも離れた場所で食料を手に入れるには、どこでも使えるものがが必要です。コインはその答えでした。

## ◆ 「税→傭兵→市場」——誰も教えてくれなかった輪環

教科書が省略してきた最も重要な仕組みがあります。

①	国家がコインを鑄造して傭兵に払う。兵士は各地で食料・酒・宿を買う。
②	商人や農民の手にコインが渡る。
③	国家が「税はこのコインで払え」と命じる。農民は市場に出てコインを得なければならぬ。
④	コインを得るために人々が集まる場所——それが「市場」の起源。

「国家がコインを兵士に払い、そしてそのコインで税を要求する。これが市場を生み出した」

— デイヴィッド・グレーバー 『負債論』

市場は自然発生したのではなく、国家が設計したものです。

「市場は自由、国家は余計な介入」という現代の常識は、歴史的には完全に逆。

## ◆ スパルタだけが拒否した

ほとんどのギリシア都市がコインを採用したなか、スパルタだけが拒否しました。

彼らが大切にしたのは、個人ではなく共同体。豊かさではなく、平等。蓄積ではなく、献身。だから意図的に、重くてかさばる鉄の串を通貨にした——持ち運べない、溜め込めない、貯蓄できない。溜め込めないお金は、格差を生まない。

そして、スパルタは負けました。

内側を守る思想は、外に出た途端に機能しなくなった。傭兵を雇えない。同盟国をお金で繋ぎ止められない。

正しい価値観が、そのまま弱点になった。強さと弱さが同じ場所から来ていた。

通貨の形が、そのまま社会の思想でした。お金は技術ではなく政治だということを、スパルタは身をもって示しました。

## ◆ 軍事・貨幣・奴隷の複合体

コインを鑄造するには金属が要る。金属を得るには鉱山が要る。鉱山を動かすには——戦争で捕まえた奴隷でした。アレクサンダー大王の軍は、1日に半トンの銀を傭兵の賃金として必要としていたと言われます。その銀を生んだのは、征服地で働かされた奴隷たちでした。

コインの輝きの裏側に、最初からこれがありました。これが、お金という光の、最初の影です。

### 【注】

注 ヘロドトス『歴史』第1巻94節。現在の研究では「最初」かどうかは議論あり。しかしヨー

1	ロップアの貨幣システムの直接の起源はリディア→ギリシア→ローマという系譜であることは確か。
注2	現在では「傭兵への支払いと市民への配給」が主な目的だったと考えられている。アテネの場合、市民が陪審員として法廷に参加する際の「日当」もコインで払われた。
注3	グレーバーの「軍事・貨幣・奴隷の複合体 (military-coinage-slavery complex)」。アテネのラウリオン銀山では数万人の奴隷が働いており、民主主義の都市アテネは同時に史上最大規模の奴隷経済のひとつでもあった。
注4	スパルタが貨幣を拒んだことと衰退の関係：「内側を守るための原理を、外に出ても変えられなかった」ことが本質。ひとつの価値観に全部を賭けた国家・組織・個人が、転換期に最も傷つくという普遍的なパターン。

### 第三章

## 大航海時代

### — 「交換」という名の略奪

#### ◆ ファラオの金——価値ではなく、神性の物質

古代エジプトのファラオたちは、なぜあれほど大量の金を使ったのでしょうか。

答えは「投資」でも「価値の保存」でもありませんでした。金はエジプト語で「ネブ」——太陽神ラーの肉体を意味する言葉と同じ語源を持ちます。金は腐らず、変色せず、火で溶かしても元に戻る。

ツタンカーメンの黄金のマスクを思い浮かべてください。  
あれは「財産の蓄積」ではなく、「死後も神と繋がり続けるための装置」でした。  
ファラオにとって金は通貨ではなく、永遠への祈りが宿る物質だったのです。

#### ◆ インカの金——「太陽の汗」と「交換の別世界」

インカ人にとって金は太陽神インティの汗、銀は月の涙でした。インカ経済は土地と食料が基盤であり、金と銀は宗教的・装飾的な意味しか持ちませんでした。コルカニヤ（太陽の神殿）の壁を覆う700枚の金板は、「資産」ではなく「神への捧げ物」だったのです。

#### ◆ ピサロの到来——価値観の衝突

1532年、フランシスコ・ピサロが168人のスペイン人を率いてインカ帝国に現れました。インカ皇帝アタワルパは捕らえられ、身代金として「大きな部屋いっぱいのお金と、二部屋分の銀」を約束しました。約束は守られました——金6000キロ以上と銀13000キロ以上が集められました。しかしピサロはアタワルパを処刑しました。

インカ人にとって神聖な物体であった金と銀が、スペイン人の手で延べ棒に溶かされ、ヨーロッパの貨幣として鑄造され直されました。

同じ金属が、一方には「太陽の汗・神性の物質」であり、  
もう一方には「どこでも通用するお金」でした。  
これほど根本的な価値観の衝突はありません。

## ◆ 「交換」と「略奪」の境界

コロンブスが出会ったタイノ族は、訪問者に贈り物を差し出しました。これは「歓迎の儀式」でした。スペイン人はそれを「交換の申し出」と受け取り、持って帰りました。

大航海時代のスペインは、インカ略奪の銀を大量にヨーロッパに持ち込みました。これがヨーロッパ全体の物価を急騰させた「価格革命」の引き金になります。略奪した貴金属が、ヨーロッパ近代経済の燃料になったのです。

### 【注】

注 1	エジプト学者ピーター・ブランドの研究（メンフィス大学）。金は「ネブ」と呼ばれ、「黄金のホルス」はファラオの称号のひとつ。ミタンニ王がアメンホテプ3世に宛てた手紙：「あなたの国では金は砂のように転がっている。少し送ってほしい」——単なる経済的要求ではなく、神の国の豊かさへの宗教的な文脈を持つ。
注 2	インカ経済は「互酬性と再分配」を基盤とする。市場も私有財産も貨幣もない、しかし機能する経済システムだった。スペイン人はこれを「遅れた社会」と見なしたが、別の原理で動く「異なる社会」だったと見るべきかもしれない。
注 3	アタワルパの身代金は金 6,000kg 以上・銀 13,000kg 以上、当時の価値で数百億ドル相当とも。ピサロは約束を果たした後「アタワルパが秘密裏に軍を集めている」という口実で処刑した。スペインは 1545 年のポトシ銀山（現ボリビア）発見後、この銀をヨーロッパに送り続け、16～17 世紀の黄金時代を支えた。

## 第四章

# インフレ・デフレ・資本主義の必然

### — なぜ貨幣は増え続けるのか

## ◆ 江戸の改鋳——最初の量的緩和

江戸幕府が財政難になるたびに行ったのが「改鋳」でした。小判を溶かし直し、金の量を減らして枚数を増やす。見た目は同じ金貨ですが、中身が薄くなっています。

260 年かけて、小判の中身は 10 分の 1 以下になりました。物価は 10～40 倍に上昇。

これは現代の「量的緩和（お札を刷ること）」と本質的に同じです。

時代と方法が違うだけで、「財政難になると通貨の量を増やす」という行動は、人類の歴史を通じて繰り返されています。

## ◆ デフレは「普通」だった——忘れられた 19 世紀

現代人はインフレが「普通」だと思っています。でもこれは、中央銀行が世界を支配するようになった 20 世紀以降の話です。

19 世紀、金本位制のもとでは、技術革新によって生産性が上がり、モノが安くなるのが「普通」でした。1880～1896 年のアメリカでは、物価が 30% 下落しながら、実質所得は 85% 上昇しました。物が増えれば値段が下がる——感覚的にも正しい話です。

## ◆ なぜ現代はインフレが「普通」になったのか

デフレには危険な側面があります。「もう少し待てば安くなる」という期待が生まれると、人は買い物を延期します。延期が広がると企業の売上が落ち、雇用が削られ、給料が下がり、さらに消費が減る——このデフレスパイラルが、1929年の大恐慌を長期化させました。

だから現代の中央銀行は、意図的に「少しでもインフレ」を維持しようとします。「今買わないと損」という心理が、経済を動かし続けるからです。

インフレは行動を引き出し、デフレは行動を凍結する。  
現代経済は、人間の「損失回避」という心理を利用して設計されています。

## ◆ 経済は必然的に「資本主義的」になるのか

ここに興味深い逆説があります。資本主義の競争は技術革新を促し、価格を下げる（デフレ方向）。しかしデフレになると経済が止まる。だから国家・中央銀行は貨幣量を増やしてインフレを起こす。貨幣量が増えると、金融が必然的に力を持つ。

これは資本主義が「選ばれた制度」ではなく、人間の心理と国家の都合から「必然的に生まれる形」かもしれない、ということです。

そしてGDPは貨幣で測られた活動の総量です。戦争でも、災害の復興工事でも、GDPは増えます。本当の豊かさとは貨幣量は、必ずしも一致しません。

### 【注】

**注 1** 江戸時代の改鋳は計13回。慶長小判（1601年）の金含有量は品位85%だったが、幕末期には約2%まで低下した。江戸の武士が米の石高で給与を固定されたまま物価が上昇し続けたことが、下級武士の困窮と倒幕運動のエネルギーになったと言われる。

**注 2** 金本位制下の19世紀デフレを「悪いデフレ」ではなく「生産性向上による良性デフレ」と評価する研究者も多い。ただしこの時期にも金融パニック（1873年・1893年・1907年など）が繰り返り起き、その対応のためにFRBが1913年に設立された。

**注 3** 行動経済学の「損失回避（Loss Aversion）」。ダニエル・カーネマンらの研究によれば、人は同じ金額の「得」より「損」に約2倍敏感に反応する。日本の「失われた30年」の要因のひとつとして、デフレ期待の定着が挙げられる。

## 第五章

# お金という装置の限界

— なぜ、測れないものが消えていくのか

## ◆ お金はなぜ強いのか

お金には、やさしさも、苦しさも、誇りも、時間の重みも入っていません。中身がない。空疎です。

でも、だからこそ強い。

中身がないぶん、どんな価値にも貼りつけられる。数字にできる。比べられる。合計できる。交換できる。管理できる。本来まったく質の違うものを、いったん全部お金に変えて並べることができる。

次のものを並べてみます。

- ・ 1時間の面談
- ・ 1本の原稿
- ・ 1回の介護
- ・ 1つの企画
- ・ 1日の気づかい

本来はまったく質が違います。でもお金にすると、同じ数字の列に乗る。すると社会は扱いやすくなります。

空疎であることは悪口ではなく、設計です。  
中身を薄くしてあるから、共通のものさしになれる。これがお金の「強さ」の正体です。

### ◆ しかし、その瞬間に落ちるものがある

測れるようになる代わりに、意味や厚みが削られます。

「話を聞いてくれて助かった」「あの場においてくれて救われた」「丁寧に扱われて尊厳が守られた」「判断を急がず待ってもらえた」——人生ではすごく大きい。でも数字にしにくい。すると市場では弱くなる。

お金が便利である理由と、お金が暴力的である理由は、実は同じところにあります。  
数にならない価値を、価値でないように見せやすいからです。

### ◆ 資本主義は「数えられるものを価値として前に出す」

乱暴に言えば、資本主義は価値のあるものを数えるのではなく、数えられるものを価値として前に出します。

でも逆に言えば、ここが見えている人は強い。お金で測れる価値と、人生にとって大きい価値が、必ずしも同じではないと知っているからです。

### ◆ お金は「価値そのもの」ではなく「装置」だ

お金は価値そのものではなく、価値を平らな数字に変える装置です。

だから便利だけど、それだけで生きると空しくなる。  
数字にできるから強い。でも、強いから本質とは限らない。

そしてここに、金と銀という物体が再び意味を持つ理由があります。金と銀は装置ではありません。数字に変換される前の、物体そのものです。重さがあり、光があり、手で持てる。

5000年間、人間がそれを手放さなかったのは、「装置の外側に、何かを置いておきたい」という本能だったかもしれません。

【注】

**注 1** プラットフォーム経済はこの構造をさらに一段進めた。Amazonのレビュー星5つ、SNSのフォロワー数——これらは信頼の代替品であって、信頼そのものではない。プラットフォームは需要に応えるだけでなく、欲望を作り出す。岡田斗司夫はこの先を「評価経済」と呼んだ。

## 終章

# ところで……金と銀は何者なのか

## — 国家・信用・電子から独立した「最後の物体」

ここまで読んで、気づいたことがあるかもしれません。  
お金の歴史を辿ると、金と銀は「お金の一形態」ではなく、  
「お金とは何か」という問いの前に存在していた、ということ。

### ◆ 永遠を欲しがる生き物

ファラオが金で棺を作り、インカの神官が金板で神殿を覆い、江戸の商人が小判を大切にしまいい込んだ。その行動の根っこに、共通するものがあります。

人間は死を知っています。そして死を知っているから、永遠を欲しがります。腐らず、錆びず、火でも戻ってくる物質——金と銀は、その欲望が投影された最古の「器」でした。

会社の会計には「永続企業の原則」があります。会社は永続するという前提で帳簿をつける。でも会社は必ず終わります。建物は朽ちます。通貨は変わります。それでも「変わらない価値がある」という前提で記録し続ける——お金を信じることも、突き詰めれば「変わらないものへの祈り」なのかもしれません。

### ◆ お金は「宗教」と同じ構造を持つ

「お金が機能するのは、みんながそれを信じているからだ」 —— ユヴァル・ノア・ハラリ

これは宗教と同じ構造です。日本の経済学者・岩井克人も同じことを別の角度から論じています。「私たちがお金を受け取るのは、ほかの人がその価値あるものとして次に受け取ってくれると信じているからだ」。貨幣の価値は、人々の相互的な信頼の連鎖によって成り立っている、と。

「みんなが信じているから価値がある、価値があるからみんなが信じる」

この循環こそが貨幣の本質だと岩井は言います。  
お金の価値に「最後の根拠」はない。あるのは、無限に続く信頼の連鎖だけです。

今、私たちの周りには複数の「お金の宗教」が並存しています。

法定通貨を信じる人—— 国家と中央銀行への信頼

ビットコインを信じる人—— 国家不要・数学への信頼

金を信じる人—— 5000年の物体への信頼

土地を信じる人—— 「場所」は消えないという信頼

これらは今、静かに分裂しています。どの「宗教」が正しいという話ではありません。ただ、自分がどの物語を生きているのかを知ることは、今の時代に必要なことだと思います。

### ◆ 金と銀が「生き残った」本当の理由

5000年間、政府は何度も通貨を増やし、価値を薄めてきました。江戸の改鋳も、ワイマール共和国のハイパーインフレも、現代の量的緩和も、形は違えど同じことをしています。

金と銀だけが、その操作から逃れ続けました。理由は単純です。

誰も、政治的に増やせないからです。

金は年間 3600 トンしか採掘できません（地上在庫の約 1.7%）。

これは「価値の保存手段として優れている」という技術的な話ではありません。

「人間の政治的欲望から独立している」という話です。

### ◆ 電子マネーの時代に、なぜ金と銀か

電子マネーは究極の抽象です。物体がない。重さがない。手で持てない。誰かのサーバーの上にある数字です。

貨幣が生まれる前に「信用と負債のネットワーク」があったというグレーバーの話は、電子マネーに非常に近い。抽象的な「所有の物語」を信じる能力は、人間がずっと持っていました。

しかし決定的な違いがあります。電子マネーは「誰かが管理する」。

その誰かが消えたとき、数字も消えます。

金と銀は消えません。

電気が止まっても、サーバーがダウンしても、政府が変わっても、物体として残ります。

#### 【注】

注 1 岩井克人『貨幣論』（ちくま学芸文庫、1993年）。1741年にオーストリアで発行されたマリア・テレジア銀貨は、ハプスブルク帝国が1918年に滅んだ後も、エチオピアのカファ地方では1970年代までコーヒー取引の通貨として流通し続けた。国家の命令でも金属の重さでもなく、「受け取ってくれるという信頼」だけで貨幣は生き続けた。

注 2 2026年現在、地上に存在する金の総量は約21万トン。年間採掘量は約3600トン（増加率約1.7%）。銀は年間約26,000トン採掘されるが、その約75%は銅・亜鉛・鉛の採掘の副産物。2021年から5年連続で需要が供給を上回る赤字が続いている。

注 3 2022年のロシアのウクライナ侵攻後、西側諸国はロシア中央銀行の外貨準備（約3000億ドル）を凍結した。デジタル上の資産は政治的意思決定で一瞬で使えなくなることが示された。物理的な金・銀はこのリスクから独立している。一方で保管・移動のコストと盗難リスクは物理資産固有の問題として残る。

#### エピローグ

## それを知った後で

お金の正体を知ってしまった。さて、どう使って、どう生きていけばいいのでしょうか。

### ◆ お金を稼ぐ方法に、変化はあるだろうか

表面は変わっています。農業から工業へ、工業からサービスへ、サービスからデジタルへ。でも根っこを見ると、ずっと同じことが繰り返されています。

「信頼を集めた人のところに、お金が来る」。これだけです。

歴史を辿ると、「稼ぐ」の型は三つしかありません。

希少性を持つ	他の人が持っていないスキルや知識。江戸の職人も現代のエンジニアも構造は同じ。
信頼の結節点になる	人とモノを繋ぐ場所にいる人のところにお金は流れる。現代のプラットフォームも同じ。
権力の近くにいる	お金は国家と暴力が作ったもの。古代の傭兵から現代の官僚・コンサルまで変わっていない。

### ◆ 三つの一里塚

信頼を得ることが、お金への囚われを少しずつ解いていく。

#### ひとつ。物語を分散させる。

法定通貨だけに全部を置かない。金・銀・土地・スキル・人との関係。どれかひとつの「物語」が崩れても、自分が崩れないように。これは「分散投資」という技術的な話ではなく、「自分が信じる物語をひとつに絞らない」という生き方の話です。

#### ふたつ。使うときに、少しだけ意識する。

お金を使うとき、それは「信頼を誰かに渡すこと」です。誰の手に渡り、何に変わるか。毎回考える必要はありません。でも時々、立ち止まれる人間でいたい。江戸の商人は小判の重さを手で感じていました。現代のキャッシュレス決済は、その感覚を完全に消しました。

#### みっつ。お金で買えないものを知っている。

5000年の歴史が教えることがひとつあるとすれば、「お金は最強ではない」ということです。どの時代も生き残ったのは、お金の外側にあるものを持っていた人たちです。関係、知恵、評判、健康、そして「自分が何を信じているか」を知っていること。

お金は道具です。  
道具の正体を知った人間は、道具に使われなくなります。  
それだけで、もう少し自由になれると思います。

### おわりに

## 四人の夜

---

ある夜の食事会。四人が同じテーブルについている。話題が、お金のことになった。

**A** 「ほんとうに怖いですね、お金って。何があるかわからないし、減らしたくないし、老後のこと考えると夜も眠れなくて。みなさん、どうやって増やしてるんですか」

**B** 「増やすなら、やっぱり集中投資ですよ。分散なんてしてたら大きくなれない。お金はお金を呼ぶんです」

**C** 「うーん、私はあんまり考えてないかも。やりたいことやってたら、気づいたら回ってた感じで」

**A** 「それ、運がよかっただけじゃないですか」

**C** 「そうかもしれない。でも、お金のために動いてた時期って、なぜかうまくいかなかったんですよね」

Dさんはずっとワインを飲みながら聞いていた。

**B** 「Dさんはどうしてるんですか。資産運用とか」

**D** 「ちょっとだけ。でも正直、お金をお金のまま持つておくのが一番怖いな、と思って」

**A** 「え、でも現金が一番安全じゃないですか」

**D** 「安全かどうかは、誰が管理してるかによりますよね。円は日銀が、ドルはFRBが管理してる。歴史を見ると、管理してる側が都合に合わせて量を変えてきた。江戸幕府も、ローマ帝国も、同じことをしてきた」

**B** 「じゃあ何に換えるんですか」

**D** 「使う。経験とか、関係とか、たまに金や銀とか。誰も量を増やせないものに」

**A** 「金とか銀って、増えないから安心ってこと？」

**D** 「増えないから、誰かの都合で薄められない、ってことです。お金って結局、みんながそう信じてる間だけ存在するものでしょう。だったら、信じられなくなる前に動いておきたい」

しばらく沈黙があった。

**C** 「なんか、お金って道具なんだな、って聞いてて思った」

**D** 「そう。道具の正体を知っていると、使われなくなる」

**A** 「……私、ずっと使われてた気がしてきた」

**B** 「俺は使いこなしてるつもりだったけど、目的になってたかもな」

食事会はそこで終わりかけたが、Cさんがぼつりと言った。

**C** 「じゃあ、道具の正体を知った後で、どう使えばいいんだろう」

**D** 「三つだけ言うと。ひとつ、物語を分散させる。ふたつ、使うとき少しだけ意識する。みつつ、お金で買えないものを知っておく。そっちの方が、どの時代も生き残ってる」

**A** 「お金の話してたのに、最後はお金じゃない話になった」

**D** 「そういうものだと思いますよ」

夜が更けて、四人は店を出た。同じ夜道を、それぞれ違うことを考えながら歩いた。

おまけ

## 言葉の罫について

---

このレポートでは「国家」「お金」「奴隷」という言葉を、古代エジプトから現代まで同じ意味で使ってきました。でも実は、これは便利のための省略であって、厳密には正確ではありません。

### ◆ 「奴隷」——ハリウッドが作った常識

「ピラミッドは奴隷がムチで打たれながら建てた」。これはほぼ全員が信じている常識です。ところが現在の考古学の定説は全く違います。

1990年代以降の発掘調査で、ギザのピラミッド近くに労働者の集落跡が発見されました。そこには医療施設があり、骨折の治療痕がある骨が大量に出土しています。つまり、怪我をしたら治療してもらえた。奴隷にそんな待遇はありません。

労働者はナイル川の氾濫期（農閑期）に召集された農民と熟練職人で、ビールとパンを給与として受け取っていました。二日酔いや家族の看病を理由にした休暇記録まで残っています。これは完全に「雇用」の記録です。

「所有物としての奴隷」という概念はローマ法から来ています。

ローマ法における「所有（ドミニウム）」——主人が奴隷に対して持っていた絶対的権力。

そして現代の「所有権」という概念全体が、実はこのローマ法の奴隷所有をモデルにして作られているという指摘があります。

### ◆ 「国家」——1648年を境に別物になった

エジプトのファラオ、ローマ皇帝、江戸幕府、現代の日本政府を全部「国家」と呼ぶのは、かなり乱暴な省略です。

境界線は1648年のウェストファリア条約です。これ以前の「国家」は支配者の私的な拡張でした。エジプトはファラオの所有物であり、宇宙の秩序を維持する宗教的装置。「国民」という概念は存在しない。

1648年のウェストファリア条約以降、ヨーロッパに「主権国家」という概念が生まれました。明確な国境・国民・法律体系を持つ近代国民国家。現代私たちが「国家」と聞いてイメージするのはこれです。

### ◆ このレポートへの正直な告白

5000年を一本の流れで語ることには、豊かさと限界が同時にあります。「国家」「お金」「奴隷」という言葉を同じ意味で使い続けることで、見えてくる大きなパターンがあります。でも同時に、その言葉の中に隠れている違いも、本当は大切です。

常識を疑う旅は、言葉を疑うことから始まります。

「国家とは何か」「お金とは何か」「自由とは何か」。  
その問いを持ち続けることが、この5000年の歴史から学べる、最も大切なことかもしれません。

## 参考文献

### 主要参考文献

- ・ デイヴィッド・グレーバー『負債論：貨幣と暴力の5000年』（以文社、2016年）
- ・ 岩井克人『貨幣論』（ちくま学芸文庫、1993年）
- ・ 岩井克人「欲望の貨幣論」を語る（東洋経済新報社、2020年）
- ・ ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』（河出書房新社、2016年）
- ・ 黒田明伸『貨幣システムの世界史』（岩波現代文庫、2014年）
- ・ ゲオルク・ジンメル『貨幣の哲学』（白水社、1999年）

### データ・資料

- ・ ワールド・ゴールド・カウンシル (WGC) 金の採掘量・在庫データ (2026年)
- ・ シルバー・インスティテュート 銀の需給データ (2026年)
- ・ 田中貴金属工業 銀価格データ (2026年)
- ・ National Geographic 「How Spain's lust for gold doomed the Inca Empire」
- ・ Scientific American 「Who are the Indigenous People That Columbus Met?」 (2024年)
- ・ ARCE 「Power Tool: How Gold Enhanced Pharaoh's Authority」 (2024年)

---

2026年5月 講演配布別冊

無断転載・複製を禁じます